

釣れ釣れなるままに

2003年思い出の釣行記 PART. 3

身長優勝 に輝く



鹿島釣狂

釣遊会第3回大会

☆開催日	平成15年6月1日		
☆開催場所	歌別川～岬港		
☆入釣場所	東歌別		
☆天気	波2m～3m		
☆潮	満潮	02:50	142cm
	干潮	10:07	10cm
☆釣果	カジカ	225mm	2匹
	アブラコ	466mm	2匹
	ハゴトコ		1匹
	重量	2960g	
☆成績	合計	987点	
	成績	身長優勝(アブラコ46.6cm)	
	持ち点	3点	
	累計点	7点(3, 1, 3)	

嵐の前の荒食いを期待して

大会の1週間前頃から台風4号が発生し、丁度大会日には本道に接近することを告げている。気象庁では、台風の北海道への上陸は資料が整備されている1951年以降で3番目の早さ、5月の上陸は65年以来38年ぶりということである。何も大事な釣り大会がある日を狙って来なくてもと思う。しかし、自然相手では気象庁に非があるわけではなく、こちらがその台風に合わせていくしかない。

幸いにも前日には、台風4号が温帯低気圧に変わった。しかし、いまだ「1日は全道的に雨が降る。太平洋側では雨の降り方が強まり、大雨の恐れがある。土砂災害に注意」と警戒を呼びかけており、油断は禁物であろう。

東歌別は沖に岩がいくつも張り出し、時化には比較的強いと思われる。東歌別バス停からの下り坂では、いつも出迎えてくれるセントバーナードが今日は歓迎の挨拶をしてくれない。舟揚場前のスピッツも静かである。台風の接近を予測して音無の構えを決め込んでいるのであろうか。海が時化する前には、魚が荒食いするはずだが、どうだろう。

防潮堤から海を眺めてみると、沖で白波が大きく叩いているが、海岸線はさほどではない。雨は相変わらず降り続けている。舟揚場には、先行者がおり、盛んに竿を振っている。話し掛けると聞き慣れた声であり、その主は『竿道会』の荻野氏であった。以前にも同じようにこの場所からカジカやアブラコを抜いた思い出がある。干潮時には彼が得意としている例の岩場に乗るのであろう。

早速、隣に入らせて頂く。間もなく、カジカとハゴトコの子ビがやって来た。荻野氏の様子を伺うと私より型が少しずつ上回っている。

雨脚が思ったよりも強く、胴付きの中に雨が染み込んできた。セオリーを無視して雨ガッパの裾を胴付きの中に入れたからだ。私は胴付きを極力一番外に履くことにしている。尿意をもよおしたときに上着を脱ぐ手間が省け、便利がいいからだ。しかし、雨が入り込むとなると別である。慌てて着直す。

真っ白い子犬がチョロチョロと近づいてくる。あのスピッツに子どもが生まれたのだ。イカゴロの臭いを嗅ぎ、嚙ってみては、口に銜えて玉砂利の上に移動させる。玉砂利は昆布干場になっており、汚しては大変とエサバケツに戻す。カツオを入れたバックの縁で盛んに臭いを嗅ぎ始めた。クーンクーンと鼻を鳴らし、蓋を開けてくれとせがんでいるようである。イカゴロと同じことを繰り返されては堪らないので放っておく。大切に飼われているのか、私を警戒する様子は全く見られない。後で聞いたところによると、安曾氏の所にもやって来て、雑食性に相応しくカツオを食べたという。

十八番の穴場を譲る

辺りが薄明るくなってきた。遠投した竿にいいアタリが出て、竿を煽る。ホンダワラがブチッ、ブチッと切れて密集した林の中から抜け出たようである。なかなかの重さでゴツゴツと首を振りながら近づいてくる。防潮堤の上に持ち上げようとするがホンダワラを引き連れているのでままならない。防潮堤の上で竿を操り、ホンダワラの塊を海面上で滑らせて右方向にある渚に引っ張り上げる。隣の舟揚場に入っていた釣り人が大物の気配を感じて駆け寄り、ホンダワラの塊をどけてくれる。中にアブラコが見えるが、予想したものとは違い30cmを少し越える程度である。丁寧にお礼を言って小アブラコを回収した。

防潮堤の際を軽トラックがひっきりなしに通るようになった。そのたびに竿尻を移動させていたのだが、その時は間に合わず、ガリガリとタイヤに踏みつけられてしまった。10年以上も愛用し、少し大物になると竿が腰から曲がり、抜き上げることが出来なかった。こんなボロ竿と思っていたがいざ失ってみると、愛着が深くなっていることに気づき、惜しい気がする。何より、竿購入のための出費を考えると頭が痛い。

街宣車のスピーカーが大音響で通行止めを警告しながら走り過ぎた。車の側面には『日高観光協会』とある。台風の接近で土砂崩れの恐れがあり、黄金道路は通行止めにするという内容である。黄金道路沿いに入っていた釣りは大いに驚いたことであろう。そして、役員はその対応をどうしたのだろう。会員を拾って歩くために、広尾町を迂回して帰ったのであろうか。

意中の岩に乗れる時間帯になった。荻野氏が浅海を越えて彼の十八番の岩に乗った。私も移動しようと荷物を片づけ始める。しかし、私が乗ろうとしている岩の手前にある舟揚場で2名の釣り人が潮待ちしている。防潮堤の上から眺めていると、少しずつ前に行く素振りである。何度も足を運んだ自分にとっては、その岩に乗ることが出来るに十分な時間帯である。しかし、彼らは初めてなのか、潮漕ぎを躊躇している。彼らを押し退けて行くべきか、行かざるべきか。結局、彼らに遠慮して諦めることにした。以前、やはり他

の釣り人に先を越され、その人物に大釣りを聞かされて悔しい思いをしたことがあるが、今日も同じ羽目になるのであろうか。

私がまごついている間に、東歌別のポイントと思われるところは、すでに釣り人で占められている。随分と出遅れたようだ。



締め切り間際に

午前7時、荷物を東歌別大平盤の真ん中に置いてから、辺りの様子を探って歩く。スキューのストックで海面下を突きながら歩くが、各出岬にはほとんど出て行けるようになっている。留吉の沢には『名人会』の金井泰樹氏や『竿道会』の堀孝行氏が盛んに竿を振っていた。

東歌別大平盤に戻り、昆布やホンダワラの付き具合、青白い海底、所々に頭を出した岩や波加減などを丹念に見て回る。昆布やホンダワラが繁った複雑な浅い盤が続く沖合に、波が大きく盛り上がってるところがある。その波頭が低くなった時には駆け上がりの岩が見え隠れしており、岩に付いた昆布が波と共に揺らめいている。そこに三脚をセットし、まずは近投で昆布の中に仕掛けをぶち込む。しかし、大きなアタリは出ない。遠投でも同じである。釣れてくるのはハゴトコばかりである。

時間だけが刻々と経過していく。あきらめの境地でさらに移動場所を探して歩き回る。仲間の吉田氏も未だ良型には恵まれていないが、最後まで頑張るようである。安曾氏が45cm程のアブラコを手にしたと聞こえてくる。荻野氏も同様である。

9時20分、エサを全て取り替えて遠投にしてから、最後の移動場所を探していると、タコ穴を探っているご老人がいる。いつもはいるはずのタコが今日は留守であると、呻いている。そして、

「あんたの釣っているところはすごく浅くてアブラコなんていないぞ。あの『せき』でやれ！『せき』で！」

『せき』という言葉の意味が分からず聞き返すが、やはりあの『せき』やれと言う。

『あそこは深くなっていて、その深みに沖からアブラコが入ってくる。そんな浅いところにアブラコなんていないぞ』

と駄目を押す。おそらく『せき』とは磯舟の出入りする深みになった所を意味するのであろう。ご老人と話しているうちにも締め切り時間が迫ってきた。この次の機会には、その『せき』とやりに打ち込んでみようと思う。

釣り場に戻ると、遠投した竿に大アタリが出る。竿を煽り、浅海の根に潜り込まれないようにと強引に巻き取る。手応えはそれほどでもない。最後の駆け上がりでも有無を言わず強引に抜き上げる。密集した昆布の上にモゴッと現れたのは予想だにできなかった体高のある見事な赤黒いアブラコである。竿もリールも新調したばかりのものなので、その威力が発揮されて手応えをさほど感じなかったのだろう。

8号のチヌバリが上顎にがっちり突き刺さっている。指先でハリを外すことが出来ず、ペンチを捜すが見当たらない。おそらく最初に入った防潮堤の上にでも置き忘れたのだろう。指先の肉が何か所も割れていて力が入らない。口をガシッと閉じられるとアブラコの歯の大きさや逞しさを感じず。

50cmに届きそうだ。今年は第2回大会に私が上げた45.5cmが今のところトップの身長だがそれを上回っているのは確かだ。年間身長のこともあり、僅かな時間だが、少しでも縮まらないようにとバツカンに海水を入れて放り込み、後片づけを始める。エリモ岬港からの帰りの時間を見積もると時間がない。防潮堤に忘れたペンチを回収し、東歌別バス停への坂道を上っていった。

上には上か

バス停に着くと、私の一番の狙いとしていた岩に乗った『狂釣会』の長谷川氏とその仲間がいたが釣果は奮わなかったと言う。打った所がポイントをはずしていたと思われるが私でも結果は同じであったろう。一度大釣りをしてしまうと、その時の記憶が頭から離れず、再び足を向けてしまうのだ。

エリモ公園で審査をした。その結果は

優勝	堀内正博	1168点 (アブラコ486mm+カジカ 326mm+3560g)	南東洋
準優勝	嵐 光博	1000点 (アブラコ403mm+カジカ 302mm+2950g)	菊水
3位	鹿島釣狂	987点 (アブラコ466mm+カジカ 225mm+2960g)	東歌別
4位	安曾和夫	956点	東歌別
5位	前野達志	946点	歌露

であった。

審査時にはまだ生きていたろうと思っていたアブラコが絶命していた。しかし、体はまだ硬直していない。死後硬直は一番その長さが減ると聞いたことがある。早く計ってほしい。しかし、審査が最後の私の時は46.6cmであった。縮まり方が大きい気がする。

安曾氏のアブラコは46.5cmであった。45cm程と安曾氏が言っていたことはやはり眉唾物だったのだ。46.5cmとなると死んでからの時間を考えると私のアブラコよりは遙かに大きかったはずだ。堀内氏の48.6cmは50cmをはるかに超えていたことだろう。アブラコは1mmの違いで安曾氏を抑えて身長優勝に輝いた。

近くで『竿道会』の審査が行われていた。エリモ港～第3降り口（2魚種身長+10匹重量）の成績である。越智氏が1801点、堀氏が1785点であった。堀氏のバックカンを持つとズシッとした重さである。『狂釣会』に参加していた『名人会』の金井氏が1612点の成績で優勝したと伝わってくる。2魚種身長+5匹重量制での成績だからどれだけ釣ったのだろう。「釣狂=ツリキチ」ではなく「狂釣=狂った釣り人」の称号を与えるに相応しい人物である。

貴方は何派

審査後に入ったラーメン店では、午前11時頃だったせいか声を掛けてもなかなか反応がない。ノットリと出てきた店主に、「やってるかい？」と聞いても返事がない。暖簾を出しているのだから、そんなことを答える必要がないと言わんばかりである。そして、その老店主が電話で奥さん呼び出している。

しばらくして奥さんがやって来た。店主が寸胴釜に火を入れて、ようやくラーメンの仕込みを始めたようである。奥さんは旦那に似合わず（欠点をカバーするという意味では似合っているのかも）愛想がよい。島氏が、昨年利用した時は、地域の運動会が雨で中止になったため、用意していたお寿司を振る舞われたと話している。今年は出ないのかというような、いかにも勿体ぶった言い回しである。さらに続けて、「今回も雨が降ったので運動会は中止になったでしょう」と督促するようにたたみ掛ける。奥さんは微笑みながらも「運動会は来週の予定です」と告げている。

道釣連浦河支部の会員が入ってきた。大会範囲が同じだった我が会の仲間と一緒に並んで釣りをしたのだろう。それぞれの釣果を確かめ合っている。浦河支部では日本海の釣り大会を計画していないと言うことだ。道釣連の大会が日本海で実施された時は、苦戦を強

いられることが予想される。太平洋での釣りと、日本海での釣りではかなりの違いを感じる。太平洋が昆布の中に打ち込む釣りで、岩による根がかりが少ない。しかし、昆布の中に仕掛けを送り込まなければならず、魚を抜き上げる時は、昆布やホンダワラとの格闘になるのは必至だ。日本海は岩の隙間に打ち込む釣りである。海藻が少ない分、それとの格闘は少ないが、根がかり対策を怠ると一投一投仕掛けを取られることは必至だ。おのずと仕掛けも違って来る。日本海での釣りが繊細なのに対して、太平洋は大がかりなものとなる。その意味で、釣り人には日本海派と太平洋派がでてくる。私は気持ちの上では繊細な日本海派なのだが、過去の成績では太平洋の方に軍配が上がるようだ。どちらにも対応できるように己の釣り技術を磨いていきたいものである。